

帯では、良質なももを産出し、全国の市場へ出荷される“もも”は年間で10,000トンを数える。高速度交通時代を迎えて、京浜地区の台所を一手にまかなう首都圏農業の確立が、今、町の大きな課題となっているそうだ。又、繊維工業と共に、果実缶詰製造業も活況を呈し、年間生産額は10億円に達している。共選所を見学する。あいにく共選所へ着いた時には、選果が終っていたが、色々選果の方法を説明していただく。果物は、取った日に選果し、その日の晩に出荷し、翌朝にはせりにかかり、早ければ午前10時頃、おそくとも夕方までには小売店の店先に並ぶ。保原町はもも・りんごの町であったが、現在は、いちご→プラム→もも→りんご→ぶどう→かき、と年中果物が生産できる仕組みになっている。なかでも、プラム・巨峰が、最近めざましい。果樹園を訪ねる。この果樹園は、7年前からりんごを巨峰に切り換え、昨年で全部切り換えられたそうだ。ももやぶどうをたくさんいただいた。大変おいしく、皆大喜びした。

8日 9時から約一時間位メリヤス産業の労働者が、どういう基盤から成立しているか、2・3人のグループに分かれて面接調査を行なった。調査対象は従業員9人以下の工場。調査内容は、1.創業者と動機、2.事業主の前歴、3.従業員について、4.経営類型、5.家族の兼業状態、6.主な収入源である。調査結果をパンチカードに書き込み、先生に提出して巡検を終えた。保原町の町役場の皆様やその他の見学先の方々の御好意に心から感謝している。

(2年 山田 智子)

富士山 巡検 (浅井先生)

9月6日～8日

一年生の初めての巡検は、浅井先生の引率のもとに富士山麓に出かけた。

9月6日、私達は高尾駅から、中央線の鈍行列車に乗り込み、巡検に出発した。発車後すぐ地図を取り出して、車窓の見学をする。しばらくして浅井先生が笹子餅をおごって下さり、巡検の意外な副産物に舌づつみを打つ。電車が進むにつれ桂川の段丘面が現れる。猿橋着。バスで猿橋、忍野八海を回った後、富士スバルラインに入り、新五合目へと向う。スバルラインは初めのうちは赤松の林の中をまっすぐ進む。しかし、高度が増すにつれ、倒木や立ち枯れの木、道路ぞいの地肌などが見え無残であった。自然破壊はかなり進んでいるようだ。新五合目で赤茶色の富士山頂を仰いでからスバルラインを下る。西湖では足和田村の山くずれの跡を見学する。急なV字谷の重った出

口の狭い扇状地に、家がしがみついていた。7年前の大惨事のおもかげはもはや失なわれ、人々は新しい生活を始めている。しかし、一夜のうちに村を崩壊させた自然の力を思うと、その偉大さが感じられ恐しい。現在の姿が何事もなかったように静寂そのものであるだけに、よけいに強く感じられる。

翌7日は猪之頭の養鱒場、わさび栽培の様子を見る。いずれも富士山の湧水を人間が利用しているのだ。今夜の宿泊地白糸の滝に正午前に到着。ここでは白糸の滝の小気候の観測を行う。観測の説明、分担の後、グループごとに別かれて風速、水温、気温、湿度を測る。天気はますます悪化し、大雨になったので観測を中止する。夜は観察結果をまとめ、地図に記入する作業を行う。

巡検も三日目になると少し疲れてくる。朝起きるのがつらい。五時に起床して早朝観測。昨日と違って、天気はすっかりよい。きのうの初雪をかぶった富士がすっきりと姿を見せてくれる。今日は大石寺、浅間神社をへて、ヘドロで有名な田子の浦港へ行く。田子の浦港は割合に小さい人工港で、徒歩で軽く一周できる。ヘドロがぶかぶか海水に浮いているのだろうと想像していたのだが、いくらなんでもそこまでひどくはなかった。しかしヘドロに汚染された水は港外に出ると、その海水とはっきり区別できるほど褐色である。それが潮の関係か、港の出口から帯状に東向きに流れ出て、水平線まで続いている。なんともいえない光景であった。こうして私達は田子の浦港を後にして帰路につき、三日間にわたる巡検を終えた。

今回の巡検の感想は『百聞は一見に如かず』ということわざに言いつくされる。見るというのは本当によくわかるものだ。ただ、その見方が問題であろう。巡検では、自然と人間を予備知識とともに地理的に見る目を養うところにその目的があると思われる。といっても、実際に巡検に行った結果は、その目的とは程遠いようだ。見方は漫然としたものであり、予備知識もたいしたものではなかった。しかし、毎晩の反省会では、今までぼんやりとしていたものが、その光景を頭の中で思い浮かべることによって、急に他の現象と結びつき、相乗的にはっきりすることがしばしばであった。初めての巡検の成果はこのあたりにあるような気がする。（1年 上 村 恵利子）

韓国巡検で感じたこと

吉 田 晶 子

9月3日に下関を出航してまる一週間、総勢四名、正井先生の韓国巡検で私にとっては初めて外